

[COMMUNION]

WEB: <http://www.nskk.org/tokyo/index.html>E-mail: comm.tko@nsk.org

PHONE: 03-3433-0987

FAX: 03-3433-8678

Diocese Office



《イースターメッセージ》

復活の意味

司祭 バルナバ 菅原 裕治

マタイ福音書の復活物語は、マグダラのマリアともう一人のマリアがイエス様の墓に向かうところから始まります。その時、大きな地震の発生や光輝く主の天使の降臨など不思議な出来事が起こります。それらは番兵たちが震え上がるほどの恐ろしい光景でした。しかし、天使は婦人たちに「恐れることはない」と語りかけ、弟子たちへ出来事を伝えることを命じます。婦人たちは、その通りにしますが、途中で復活のイエス様に出会い、それでも「恐れることはない」と告げられます。このようにマタイの復活物語は、復活の出来事とは、恐るべき事柄であるが、恐れる必要はない喜びの事柄であると伝えており、そこに復活の意味を探る鍵があります。

事が起こったからではなく、そこに死が関わっているからです。死を終わりと考えると、そこから全ての恐れが生じます。そしてその恐れは人が生きる意味を束縛し、人間に自分の欲望を満たすことを欲し、妨げになる対象を排除し、死を可能な限り避ける生き方へと促されてしまいます。そこにあらゆる争いの原因があると同時に、争いを正当化する根拠も派生します。また死を恐れる限り、十字架の出来事は、恐るべき敗北の象徴としか認識されず、復活を告げられたとしても、それはただ不思議な恐ろしい出来事に終わるのです。



物語の婦人たちも最初はそうでした。彼女たちは、イエスの死を終わりと受け止め、葬りに向かったからです。しかし、彼女たちは、恐ろしい復活の出来事に本當の命の始まりを見出しました。この婦人たちの行動は、旧約にみられる「主を恐れる」という信仰ある方のそれと類似しています。旧約に描かれている信仰において、主を恐れることは最も大切な事柄であり、それ以外の人間のあらゆる営みもそして死も恐れる必要はないからです。物語の婦人たちは、同じ信仰に至ったと言えますが、これ以上の事柄を確認しました。それは復活したイエス様の方から彼女たちに出会い、彼女たちは、恐るべき主が、自分たちとともにいてくださることを体験したから

です。彼女たちは、復活のイエス様と出会い、自分たちも同じく永遠の命に入る存在であることを確信し、何も恐れる必要のない存在として新しく変えられて、喜びをもって今を生きるように導かれました。これは、また彼女たちが、自己の目的を達成するために争い合うことなど全く必要のない生き方に入ったことを意味しています。

復活は、物語の婦人たちと同じく、私たちが礼拝で出会うイエス様に、私たち一人ひとりととつての真の希望があることを意味しています。しかし、それだけではありません。争いの絶えないこの世界にあつて、本當の平和とは何であるか、またそれをどのように実現するか、それを知るための唯一の根拠でもあるのです。

(聖パトリック教会牧師・小金井聖公会管理牧師)



特集・神学生が与えられるために

今回の特集は教区の神学生・聖職候補生に関わる働きとして聖職養成委員会とモニカ会を取り上げ、その活動内容等を、また今年神学院を卒業し、私たちの新しい働き人に加わった太田信三聖職候補生を紹介する。

聖職不足への取り組み 挑戦する聖職養成委員会

聖職養成委員長 吉松英美

東京教区から数年ぶりに聖公会神学院の卒業生が出た。太田信三さん（聖アンデレ教会勤務）である。久しぶりの青空である。自費で入学した阿部ゆりさん（東京聖マリア教会）も無事卒業を迎えた。神学院で学んだ事をこれからの教会生活に生かして欲しいと願っている。

4月には2人の神学生が誕生した。高柳章江さん（神田キリスト教会出身）と入江一弘さん（神愛教会出身）である。自費入学ではあるが、大和孝明さん（清瀬聖母教会出身）も入学した。ご健闘を祈りたい。

活路を開く「信徒黙想会」

ここ数年、神学生の退学や教会

バーの経験もない人が多い。

そこで計画したのが信徒黙想会である。一般の黙想会と違い、参加対象を「将来聖職への道に進みたい人」「聖職の仕事に関心を持ち、もっと知りたいと思っている人」「教会で若い人を指導育成する立場にある人」とした。

テーマも礼拝の基本である「祈禱書とはなにか」から入り、「聖職になること・信徒であること」等とした。毎回20人から25人が参加する。この



黙想会で好評なのが指導牧師との個人面談である。一人当たり15分ほどであるが、出てくる時は顔をほてらせている。この

黙想会を通じて神様の召しに応える人が出てくる事を期待している。

今年は前期黙想会を5月17日（土）、ナザレ修女会で開催する。テーマは「牧師の仕事―生活・祈り・喜び」。指導講師は京都教区退職主教武藤六治師。

自分の問題として考える―「教会訪問」

聖職養成委員会のフィールドワーク第2弾として今年から実施するのが「教会訪問」である。聖職者や聖職志願者の減少は誰にとっても心配であるが、しかし、その割には危機

神学生を支えるちから

モニカ会の歩み

モニカ会会長 佐藤正光

大久保忠昭前会長から引き継ぎ、昨年秋季の第2回幹事会よりモニカ会の会長となりました練馬聖ガブリエル教会の佐藤正光と申します。東京教区の皆様にはモニカ会の発足以来変わりなくご支援ご厚情を賜りまして、心より感謝申し上げます。

廣瀬喬元会長が就任時に作成された「モニカ会の歩み」というプリントがあります。

これによればモニカ会前身の東京教区神学生後援会は1986年に神田キリスト教会の田中義一



長の方に再発足し、87年に神学生経費全額92万円を5名分460万円給付したようです。対象者は3年次が加藤博道、佐々木道人、2年次が遠藤雅己、下条裕章、1年次が香山洋人の各神学生で、その歳月を感じます。88年には会費収入360万円を目標とし、神学生1人当たり学費・寮費80万円、参考書代12万円を給付しました。89年、竹田眞主教の命名でモニカ会となります。この年、神学院費が増額したため教区と負担を

れました。

90年から91年にかけて私は博士課程の大学院生でしたが、中国の蘇州大学に1年間日本語教師として赴任することに、帰国後、安達さんという教会幹事の方から引き継ぎました。安達さんは中国まで何度かお手紙を下さり帰国を待ってくださいましたが、春以降お手紙が来なくなりました。帰国して亡くなったとお聞きしました。以来私は、モニカ会は神様が安達さんを通して与えられた使命だと思ふようになりました。モニカ会に関わって20年以上になりますが、これまでの会長からしても私が適任であるとは申せません。ただ、現在は常任幹事会やご相談できる方も多いので、これも使命だと考えることにいたしました。

現在のモニカ会は、1年に図書費60万円、家族がある方にはさらに家族費24万円を給付しております。毎年の献金額は約400万円弱で発足当時の目標を上回っております。ただ、2000年以降の東京教区神学生は1〜3名、そのため繰越金は1700万円を超えます。これは多量に見えますが、家族のある神

勤務中の聖職候補生の退職が相次いだ。状況を打開するためには、会議ばかりでは駄目だ、思い切って外へ出てみようと思ひ、2009～10年の2年をかけて6つある教会グループを訪ねて意見交換をした。その結果、教会内の若い人を育成する環境が充分でないことが分かった。

そのせいか最近聖職志願をする人は信徒歴が浅く、教会の事や聖職と信徒の役割の違いなどを知らず、サー

備えの時に

聖職候補生 太田信三



3月1日、卒業礼拝をささげ、聖公会神学院を卒業しました。多くの祈りに支えられ歩んでこられたこと、主に感謝します。4月からは聖アンデレ教会にて、笹森司祭のもとで学びと働きの日々が始まります。

卒業し、あらたな歩みへの備えの時にあって、親知らずの隣の歯が虫歯になっていくことが分かり、治療のために親知らずを抜歯しなければならなくなりました。いつもの歯科医院では抜くことができ

意識が乏しいのはなぜか。「誰かがなんとかしてくれるだろう」では、問題解決の糸口は見つからない。

そこで今年は直接教会へ出向いて皆さんと話し合いの場を持ち、自分の問題として一緒に考えてみようと思っている。

時代は激しく動いている。前年の単なる踏襲ではなく、常に「何か新しいこと」を求めて挑戦していききたい。

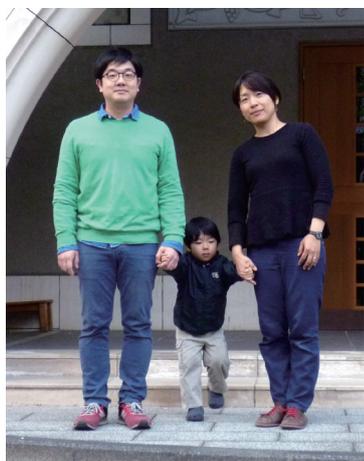
ず、大病院を紹介されました。いつもの歯医者さんから「オペに1時間半はかかると思うよ」等と脅され、食事も喉を通らない程の恐怖の中、いよいよ大病院へ。しかし、そこで言われたことは…「これなら15分で終わりますよ。口だけ開けていてくれれば大丈夫！」…暗闇からの大逆転。これぞ福音。「助かった！」と心から思いました。

「口だけ開けていてくれれば大丈夫」…この言葉にハッとさせられます。備えの時にあって、これからの日々「信じて委ねなさい」と、神さまに言われたように感じました。恐れや憂いばかりか、満足、喜びもすべて「神さま」から離れてしまったなら、それらはわたしの心を捉えて離さず、支配し、神

分かち合うことになり、給付額は神学院費60万円、図書費12万円となりました。89年12月から90年1月まで神学院の授業が中断される事件もあり、91年3月に教区神学生が初めて0になるという経験をしました。92年には図書費を月額3万円に増し、また全国各教区の給付状況を調査、家族手当や聴講生手当について検討を始めました。93年に常任幹事制が始まり、モニカ会報第1号も発行さ

を斥けてしまいます。そして、いつの間にか、虫歯のように病が入り込み、進行します。虫歯は毎日のケアが大切。信仰の歩みも、日々み言葉から離れず、神さまのそばを離れずにいなければ…。

歯科の会計を待ちながら、「神さま、いつもそばにいて、わたしを捉えてください」と願い、祈りました。備えの時にあって、大



～プロフィール～

1980年7月14日生 (33才)

兄2人、姉1人の末っ子

家族構成・妻・真由、子・喜人 (きと3才)

教名・ヨセフ

趣味・読書

マイブーム・植木

大学では哲学を専攻

COAのスタッフとして活躍

卒業後は7年間某服飾メーカーで働き、30才の時に神学院に入学。

卒論のテーマは、

「言(ことば)」なるイエスとの「出会い」

～ヨハネ福音書における「見る」「見られる」「再び見える」～

切な示しを受けました。

あらたな歩みの上にも、主のみ守りと導きがありますように、どうかお祈りください。

(聖アンデレ教会勤務)

司祭と語ろう(その9)

司祭 卓 志雄

今回は、現在練馬聖ガブリエル教会で司牧され、教区の宣教主事もされている卓志雄司祭に、信徒の下泉小波さんと道須利一さんからお話を伺っていただきました。

― 先生は日本にいらして何年になりますか。

卓 99年に来ましたからもう15年になります。

― そうですか、人生の半分近くになりますね。

卓 そんなに若くないですよ。もう41になりますから(笑)。

― どうして日本に来るようになったのでしょうか。

卓 実は私が海軍にいた時、父がカルト集団のテロによって被害されたんです。ジャーナリストであった父は聖公会の司祭を目指した

時もありましたが、司祭になるより

は、中立的な立場をもってカルトに対する取り組みをすることがあなたの使命ではないかと当時の主教に言われ、司祭の道で



はなくジャーナリストと研究者の道を歩みカルトの取材をして記事を書いていたのですが、そのせいで、あるカルトに恨まれて、その信者に殺されたんです。

― 衝撃的ですね。

卓 その1年後、兵役が終わり、専攻であった電子工学部をやめ、「司祭になれ」という父の遺言を守るため聖公会大学の神学部に入学しようと思いましたが、しかし神学部は編入の枠がなく、日本語学科の募集があつたのでそこに入りました。

― 韓国は複数専攻が出来るので、神学部も専攻して、4年生の時に交換留学の試験があり、それで立教のキリスト教学科に入るため来日しました。

― 昔はロック・ミュージシャンになりたくてバンドをしていたと聞いていますが、いつ頃あきらめたんですか。

卓 まあ実力もなかったし、大学を休学して軍隊に入った時、人は理想だけでは生きられないと思いました。

― 前に聞いたお話しですが、韓国では男の子はあまり仕付けなくても、兵役があるのでそこへ行けば、みんな良い子になるらしいですね(笑)。

卓 ですから青年時代があまりなく、少年から兵役を経てすぐ大人になる感じですね。

― 軍隊に行く前と後ではそんなに違うんですか。

卓 ある意味極限状態の経験をしますから。

― 立教を卒業した後、すぐに神学院にいかれたんですか。

卓 いや、学部と大学院を卒業してから1年間進学や進路のことで悩みながら宅配便などのバイトをしていました。その後清瀬聖母教会で推薦をいただき神学院に入りました。

― 韓国と日本では司祭に対するイメージが違うと思いますが、韓国では憧れの存在のようですが。

卓 今はどうでしょうか。昔は私も憧れました。特に兄が民主化運動で逮捕された頃、聖公会の司祭団がプロセツション(列)を組み街に出て、不正義な権力に抵抗している姿を見た時は感激しました。当時キリスト教は

社会において大きな信頼を得ていました。でもその後、聖公会ではないですが、牧師の不祥事や1回の礼拝で1万人というメ

「司祭の1冊」

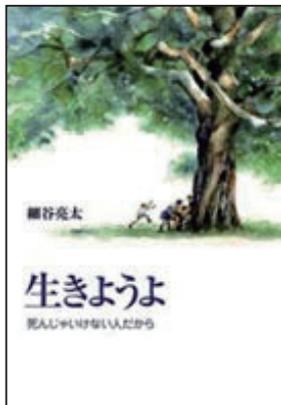
『生きようよ』

細谷亮太著

岩崎書店、2010年刊

司祭 高橋 宏幸

聖路加国際病院小児部長として尊い働きをしてこられた細谷亮太先生が、ご自身の体験を添えながら、心から入り出される命へのメッセージを大変読み易い言葉で綴っていらっしゃる。



で、人は人としての命を生きたることができるのだ(第一章)、「子ども時代はあつという間に過ぎてしまいが、そのときに感じたこと、考えたことは、人が生きるのに大切なことばかりのような気がします(第二章)、「魂がにこらない生き方(第三章)」、「地球上に人の役に立つことを喜びに思える人がいっぱいになれば、戦争もなくなり、平和がくるはずです(第四章)等々、真摯に命と向き合われるお姿や、授かった賜物を医療の業を通して献げられる細谷先生のメッセージは、キリスト教が「命の宗教」であることを再確認させられる上での道標ともなります。

間近の高等科三年生最後の学年礼拝の折、教話の中で必ず伝える言葉が「生きなさい」でも「生きろ」でもなく、「生きようよ」であるからでした。四章にわたって、心に染み入る言葉が散りばめられています。逐一書き並べられませんが、「死を忘れないこと

ご復活の期節、そのテーマが「命」であることに思いを馳せる上でも、相応しい一冊と言えましょう。

ガチャーチのお金集めの問題などで一般の人の信頼を失ったんです。

― 確かに武道館のようなところで礼拝をしていますよね。

卓 そう教会にATMがあるんですよ、それで献金が出るんです。

― 先生は韓国籍のまま日本で司祭になられたのですが、お互いの歴史や政治的なことでやりにくいと思われたことはありませんか。

卓 私の司祭として大切に考えているのは「命」です。世の中の構造や不条理によって痛んでいる人や苦しんでいる人に対して教会が為すべきことをする。歴史や政治よりも大切なことです。ただいつも緊張の中にいたいと思います。永住権もあえて取りませんし、パスポートも一般のままです。

― あえて旅行者、旅人であるという道を選んだんですね。

卓 そういって格好いいですね(笑)。

― あと司祭になることを決心した時、お父様の事件のことで「赦し」ということをどのように自分の中で消化したのでしょうか。

うか。

卓 それは今でも「赦す」ということは出来ません。ただ痛みを忘れていくというか鈍感になつていく気がします。

― だんだん癒されてきたんですよ。

卓 そうかもしれません。復活後のイエスが、まず罪の赦しを弟子たちに伝えたということは意味のあることだと思つています。宣教の場において苦しみや



悲しみの中にいる人を見ると、自然と心が痛み切なくなる、それは父の事件があつたから理屈じゃなく分かるような気がするんです。

― 今、宣教主事の働きもなさっていますが、私がちょっと不満なのは先生が宣教に関してリードすると思つた教会は協力したのに、事務的なことで忙殺されているような気がします。

するんです。

卓 以前のような宣教委員会があつての宣教委員長の働きとは違います。今は「正義と平和」や「信仰と生活」などの委員会が実行部隊ですから、私はそのバック・アップとコーディネーターをする仕事ですね。本来の宣教主事の働きはもつとあるんですよが、今は過渡期だと思つます。

― 最後に、練馬に先生が来られて7年になりますが、今の練馬聖ガブリエル教会に相応しい80周年(来年)を迎えるための7年間だったような気がします。

卓 今年の信徒総会で聖句を「あなたがたは地の塩、世の光である」とし、「―派遣された喜びを胸に―置かれたところで咲きなさい・日常の営みの中で主に会います」をこれから教会が目指すビジョンのテーマとしました。信徒一人ひとりが家庭、会社、学校でキリストの香りを放つことが宣教なんです。

― 素晴らしいビジョンですね。今日はどうも有り難うございました。

「ちょうどこの日、二人の弟子が、エルサレムから六十スタディオン離れたエマオという村へ向かつて歩きながら、この一切の出来事について話し合っていた。」(ルカ24・13)

エマオに向かつていた二人の弟子は暗い顔をしていた。推察するに二人はエルサレムから逃げ出して来たのであろう。しかし、エルサレムからエマオへは60スタディオン＝約11キロ。時速5〜6キロの歩行が当時の平均と聞くので、2時間も歩けばエマオへは到着できる。昼に出発したとしても、エマオへの到着が夕方というのはやはり遅い。二人の歩みが逃亡者の歩みでなかったことは明らかである。婦人や弟子たちから伝えられたイエスの復活についての論じ合いが歩みを遅くしたのであろう。だが、弟子ならば喜び勇んで戻らず、エマオへは喜び勇んで戻らず、二人がなおも離れ去ろうとしていたのは何故か。それ

《聖書を開いて》 ⑫

連れ戻して下さる羊飼

執事 倉澤 一太郎

はイエスの受難の際、彼らがイエスを見捨てて逃げたためである。復活を信じ喜びたい。でも今更、どの面を下げてイエスの御前に出ることが出来るようか。イエスを見捨てた裏切者であるとの自覚が喜びの知らせを素直に受け取ることを阻み、暗い顔と遅い歩みにしたので。

復活のイエスは二人だけではなく、逃げ出した全ての弟子を訪ねられ、神の赦しを伝えて和解の食事の席へと招かれ、彼らの暗い顔を喜びへと変えられた。自分も教会から離れようとしたことが幾度もあり、その度ごとに異なる招きによって連れ戻されたが、離れ戻される度にイエスの許へ、食事の席へ戻りたいという思いが強まったが、思い出される。イエスは離れようとする者を放つてはおかれず、自ら連れ戻しに赴かれるだけでなく、離れる危機をよりご自分に近寄らせるための好機へと変えてしまう方なのである。

第3回U26 全国集会

U26とは2011年に発足した18〜26歳を対象とする、管区青年委員会公認の全国の新しい青年団体です。今回の全国集会是3回目。私は去年の第2回にも参加しました。今回は大阪で開催されました。北海道、東北、東京、横浜、中部、京都、大阪、神戸の各教区から29名が参加しました。

様々なデイスカッションの中で教会によって違うことや共通点、それぞれの悩みを共有しました。自分と同じように教会での奉仕活動をしている仲間の話を聞いて今まで自分にはなかった考え方や新しいアイデアを得ることができました。集会の中でテゼの祈りという時間がありました。フランスのテゼの修道院で行われている、歌と祈りの時間です。ろうそくの灯りがゆれるなかで、み



んなで繰り返し歌を歌っている、とてもおちついて、心穏やかに静かな気持ちになつていきました。

「U26のこれから」という話し合いのなかで、あるグループから提案がありました。全国の青年が同じ場所に集まるのは難しいけれど、それぞれの場所と同じ時刻に、同じ活動をしてその様子を共有すればよい！まず

は鍋だ！3月22日に全国の教会でそれぞれが鍋をして、その様子をみんなで共有しようという提案です。全国で100人集まったらよいね！という願いを込めて「100人鍋」という名前が付けられました。

3月22日、東京教区の「100人鍋」はお隣の横浜教区と合同で行いました。なるべく地域の特色を出した鍋にするように、ということでしたが、東京には

ご当地鍋はこれ！という鍋はないので、鶏鍋にしました。鍋だけでなく、たこ焼きや、豚の生姜焼き、ゼリーやチョコケーキも出して、豪華な鍋パーティーになりました。全国の鍋の様子 Facebook でリアルタイムに

共有し、最終的に全国で123人が鍋を囲み、100人鍋を達成することができました。なんだか本当にみんなで集まって鍋をしたかのような一体感を感じていました。同じ場所に集まる

ことができなくても、同じ思い
聖アンデレ教会 藤波果歩

〈原発と放射能に関する特別問題プロジェクト〉

シリーズ 原発 Q&A その②

監修 河田昌東

【Q3】原発のコストは安いのだろうか

【A3】2011年3月に政府が発表した最新発電コストは、kw 時当たり原子力が5〜6円、LN G火力7〜8円、水力8〜13円で、原発は安いとされてきました。しかしその計算方法は、あるモデルプラントを想定して計算したものであり実際のコストではないという事です。

立命館大学国際関係学部大島望一教授は、社会がこれまでに支払ってきたコストの実績値をみなければならぬと、1970年度〜2010年度平均の実際のコストを出しています。
すなわち、①発電事業に直接要するコスト(減価償却費、燃料費、

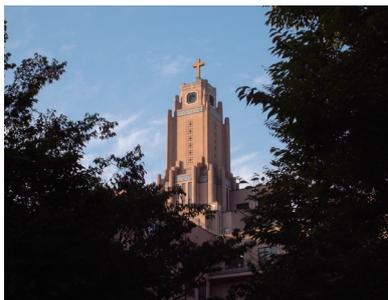
保守費など) ②政策コスト(技術開発、立地対策)を含めるとkw 時当たり原子力1025円、火力991円、水力719円となりますが、これらに事故コスト、使用済み核燃料の処理・処分コストは含まれていません。更に本来は③環境コストとして温暖化対策費用、事故被害と損害賠償費用、事故収束・廃炉費用、現状回復費用、行政費用なども含めるべきとしています。

2011年の原子力関係政府予算は4330億円、その内電源立地対策費が4割、高速増殖炉サイクル関連も同じゆなど日本原子力研究開発機構の予算が4割を占めています。本格稼働できないもんじゅに税金が毎日ほぼ6千万円使われていることになりま

現在の電気料金には発電費用、送電費用、再エネ付加金(再生可能エネルギーの促進賦課金・2012年に追加)、税金(消費税と原発の維持促進に使われる「電源開発促進税」が含まれています)がこの税金は電気料金の明細書には直接記載されていません。

2011年の原子力関係政府予算は4330億円、その内電源立地対策費が4割、高速増殖炉サイクル関連も同じゆなど日本原子力研究開発機構の予算が4割を占めています。本格稼働できないもんじゅに税金が毎日ほぼ6千万円使われていることになりま

ようこそ聖路加国際大学 聖ルカ礼拝堂へ



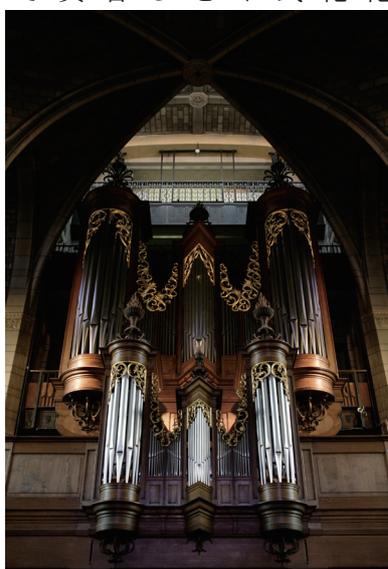
この4月より聖路加国際大学に付属する礼拝堂として名称新たに歩み始めることになりました。チャプレンの所属する組織も「キリスト教センター」と名前を改め活動していきます。その聖ルカ礼拝堂の役割を大きく3つに分けてご紹介します。

まず聖路加国際大学のための礼拝堂です。就職感謝礼拝、入学感謝礼拝、卒業感謝礼拝を始め、各式典の執行や、キリスト教精神を理念の基盤としている病院・看護学部の教職員や学生に向けてのメッセージを発信しています。

2つ目は病院のための礼拝堂です。入院・通院を問わず加療中の患者さんやご家族のために様々なプログラムを提供しています。祈りと音楽を合わせた「夕の祈り」、「お昼のコンサート」、「患者さんのためのオルガンアワー」、緩和ケア病棟「ホー

ムコンサート」、小児病棟「うたの会」など、参加される方のできるだけ合わせた工夫をしています。

そして3つ目は東京教区において教籍を置く信徒や来訪いただいた方々のための礼拝堂です。現在は400名弱の信徒が礼拝堂に所属し、主日礼拝は平均して100人程度の参加があります。礼拝堂の



特性上、患者さんなど初めて礼拝に来られる方も多いため、温かくお迎えするためウエルカムスタッフやアツシャーが気を配るよう心がけ、そして礼拝後に一時の歓談がもてるようにお茶のサービスなどでおもてなしをしています。

また活動は礼拝堂の中だけでなく地域との交流も行つて

います。礼拝堂メンバーの中で病院ボランティアは少なくありません。また、近隣の築地本願寺、カトリック築地教会と合同で「築地風琴会」というオルガンリレー演奏と祈りの会を数回開催しました。パイプオルガンの演奏による宗教、宗派を超えた「平和を願うつどい」でした。このように聖ルカ礼拝堂は様々な側面に応じた働きができるよう努力しています。わたしたちのミッションステートメントに掲げた『キリスト教の愛を常に示し続ける』ことを実践するように務めています。

礼拝堂の屋上にある十字架や、時を告げる鐘の音、そして礼拝堂を彩るステンドグラスやガルニエ社製のパイプオルガンなど、わたしたちに与えられた「器」を大切に活かして、多くの人々にキリスト教の愛を常に示し続ける存在であり続けたいと思っています。皆さまもどうぞお気軽にお立ち寄りください。

鈴木茂之

《信徒リレーエッセイ》

祈り続ける

聖パウロ教会
押野見 真理

つい数ヶ月前に起こった関東での大雪。私の住む東京でさえ一晩にシンシンと雪は降り積り、地域によっては街が雪に覆われ食物が届かない、家から出られないといった思わぬ自然の恐怖に直面しました。

しかし今、この雪の中で着実に育った命は春の芽吹きとして、満開の桜となるほどの春になりました。自然はその限りない美しさを持つと同時に、果てしない威力を持つ恐ろしさがあり、この素晴らしい命の誕生にはこの両面が必ず在るといふ事が、今回の大雪で私の胸に深く響きました。神様はこの豊かな自然を、命を、私達に与えて下さいました。生きてゆく上で立ち向かう事すら困難な状況や八方塞がりになった時、大雪を乗り越えた桜の樹がジッと春が来るのを祈り続けて待つていたように、私も神様の命の恵みをひるむことなく受け止め導きを祈り続けて歩んでいきたいです。

『退職にあたって』

回顧・回想・回帰

司祭 長谷川 正昭



ろがあります。

つらつら振り返ってみますと、社会人としての経験を踏んだうえで、召命感に駆られ神学校に入ったのではないから、牧師としては40年以上のキャリアがあります。べつに長いから尊いというものではありません。むしろ、社会的経験を経てないぶん、世間知らずで独りよがりなところがあるだろうと自己分析しています。

以上のようなことを或る

信徒に語ったら、「純粋培養の方がずっとよいですよ。社会擦れした牧師がよいとは限りません」と慰められました。いろいろな慰め方があるものです。

小職の神学校同期生は7人おり、いずれも大学卒業と同時に、ほとんど社会的キャリアを積まないうちに神学校入りした純粹培養でした。どちらがよいか何とも言えませんが、小職自身はいまだに社会的経験に憧れ続けているとこ

ろがあります。とは言え、もう定年退職です。社会的経験もへったくれもありません。こんなことを最初に書いたのは、聖職を志願する人が少なくなっってしまったという現状を踏まえて、〈召命感〉という厄介な言葉をもう一度考えてみたいと思ったからです。

神学校では次のような言葉を聞きました。「現場に出ると、さまざまな信仰を持った信徒を司牧しなければならいから、神学生は素朴な信仰を一度突き崩されて、3年間かけて煉瓦を積み上げるようにもう一度、堅固な信仰を築き直さなければならぬ」

先輩の神学生にも言われましたし、教授にも同じようなことを教えられました。現在の神学校がこういう方針をとっているかどうか知りませ

ん。しかし、これはなかなか重要な事柄を含んでいると思います。個人的な事情にわたって恐縮ですが、小職は学生時代に赤岩栄の『キリスト教脱出記』に影響され、それをなんとか乗り越えて神学校入りしたので、上記のような方針のキリスト教教育（とくに新約聖書学）を受けても「突き崩される」ということはあまり感じませんでした。しかし、場合によっては動揺したり、おかしくなったりすることも代々の神学生の中にはあったようです。

それにつけても、気になる

ことがあります。文語祈祷書の聖職按手式の序言によれば「必ず召され、試みられ、適当なる者と認められ」という文言が短いなかに2回繰り返されているにもかかわらず、口語祈祷書ではつけ足しのように1回しか出て来ません。そのかわり文語祈祷書にはな

かった三重の職務である主教・司祭・執事の務めの説明が加えられています。門戸を開放しようとしてかえって逆効果

に陥ったのではないかという感が無きにしてもあらずです。昔がよかったなどといったずらに回顧的になるつもりはまったくありません。しかし、祈祷書の口語化自体も同じような運命にあることを考えると、宣教的にもこれは相当考えてみるべき問題を含んでいるように思われてなりません。

とまあ、偉そうなことを書きました。司牧の任を解かれることには変わりありません。

ん。司祭職とその召命感終身のものですから、別のかたちでそれを果たせ、という摂理なのでしょう。

— 編集後記 —

今回の特集は聖職養成委員長から企画の提案をいただき実現。これからもいろいろな委員会や教会などとコラボして紙面を作っていくたいので、よい企画があればご一報を下さい。

次回ペンテコステ号

6月8日発行予定

ちょっと聖書、ときどきユーモア（十二）

1. 説教の長い、短い

信徒 A 「今度の牧師さんは、説教が短くていいよね」
 信徒 B 「でも説教の時間は前の先生と変わらないよ」
 信徒 A 「そうか、それじゃあ前の先生の説教は長く感じていただけなんだ」

2. 仕事

学生 「牧師先生、今度ようやく仕事が決まりました」
 牧師 「それはよかったですね」
 学生 「それも先生のいつも言っている“仕事をするなら人々に夢をあたえる仕事を選びなさい”というその言葉通りになりました」
 牧師 「ほう、それでどんな仕事をするようになったんですか」
 学生 「はい、宝くじ売りの店員です」

3. イースターの意味

教会学校の先生 「今日はイースターです。皆さんはイースターの意味を知っていますか？」
 子ども 「はい、まじめでみんなの手本になるような芸能人（スター）のことです」